日本思港伝

第29回

作・佐々木守
え・岡本颯子

第25章 筑紫戦塵

（一）

六八一年春、九州那の津の港は時ならぬにぎわいをみせていた。九州一円から成人の男子たちが募集された。いや募集というよりはほぼ強制的につれてこられた。また、百姓たちはほとんど掠奪同様にして兵糧米を徴発されていった。港には百数十隻の船が並び、その艤装と、そして新しくつくられる船のカンナの音、ノミの音、槌の音が玄海灘にこだました。一方、徴発された若者は二手に分けられ、多くは兵士としての訓練をうけたが、あとのものは、那の津の漁師たちと共に船にのり水夫として徹底的に叩き上げられることになった。

古くからあった港だったが、しかし、この時ならぬ膨大な船と軍隊の集結によって那の津は、一躍寒村の港から、日本の中心地のような様相を呈しはじめた。いや、それは何も軍船と軍隊ばかりのせいではなかった。実に天皇も、皇太子もまたここにうつっていたのである。那の津はいま、日本の首都になったといってよかった。

那の津、現在の博多港である。

軍船の準備がととのえられる一方、陸戦隊のほぼ半数、三千に近い兵力は、築紫平野をとどろかして馬術の練習に励んでいた。指揮するのは勿論能登軍団の白布（シラギヌ）であった。いままで、大和朝廷の秘密兵力として天皇しか知らぬ白山王道だけを通じて、北陸の能登にその実力を養って来た能登軍団は、大化改新における中大兄皇子のクーデターのバックボーンとして、民衆の表面に現われると、隊長白布の大和朝廷の正規軍として認められたいという希望のため、かずかずの暴挙を行なって人々の眉をひそめさせて来たが、いまようやく積年の望みを達しつつあった。

陸戦隊のほぼ半数の指揮をまかされた白布はいま得意の絶頂にいた。大和、九州から摘発した馬に、三千の精鋭をのせて、朝は暗いうちから、夜は星の出るまで、筑紫平野には馬蹄の轟きのとだえることはなかった。

白布の訓練は熾烈をきわめた。そのため、落馬して馬にふまれ、傷を

負う者、死ぬものの数は日ましにふえた。しかし白布は頓着しない。弱い者はくたばるがいい、生き残った一騎当千こそが真に能登軍団員たる資格をもつのだ、それが白布の考えであった。

　筑紫平野の夜、白布は隊長のための幕舎を出て満天の星を仰ぐ。

　父よ、母よ！　私はまもなくあなたたちのふるさとへ参ります。

　少年の頃から夢に見た大陸が、いま海一つをへだてた先にある。その大陸の大草原で、思うさま馬を駆ることの興奮で、夜中に目覚めたこともいくどもあった。その大陸へ行くのだ、まもなく。

　それにしても、天皇や中大兄は何をしているのか。奴らは、戦いよりも宮殿を作ったり女と歌を作っている方が楽しいとでもいうのか！

　白布は磐瀬行宮（イワセノカリノミヤ・現在の福岡市三宅あたり）の空をにらんだ。そこに六十八歳の老女帝・斉明天皇がいた。

　すでに若草はあたり一杯に萌え、草花は夜目にも白く、花をつけていた。

　白布はその時、静かに草を踏む足音をきいた。

「阿曇連比邏夫（アズミノムラジヒラフ）ではないか」

　白布の目に火花が散る。阿曇連比邏夫は白布と勢力を二分する陸戦隊の一方の将軍であった。いや、比邏夫が訓練しているのは兵士の半分ではあるが、事実は比邏夫が将軍なので、白布もまたその掌握下にあるといってよかった。

「白布、少し訓練がはげしすぎはしないか。このままでは、韓国へつく前に兵士たちは疲れ切って、いざ戦いという時には役に立たぬのではないかな」

「そんなことをいいに来られたのか。私には私のやり方がある。兵をまかされた以上、私のやり方を黙ってみていてもらおう」

「そうはいかない。征韓軍の将軍として、私は兵たちすべてに責任があります」

「あなたは、自分の地位をもち出して、私に命令しようといわれるのか」

「白布！」

「結構だ。ではその征韓軍大将軍におたずねする。戦いのために集めたはずのいくさびとに、木こりの真似ごとをさせているのは如何なる理由なのか」

「あれは……」

「天皇の新宮殿造営のため、――いいわけはきかぬ。比邏夫殿、我々は何のためにはるばる都から筑紫まで出て来ているのだ。天皇の宮殿を作るためか、ちがう、たたかうためではないのか」

「しかし、御老体のスメラミコトは……」

「よせ！　天皇も我らと同じ幕舎にねればよい。つまらぬ宮殿をつくる金があったら、いくさのためにそそいだらどうなのだ」

「それは私にいってもムリというものです。何事もすべて皇太子が…」

「中大兄か！」

　はき出すように白布は目をつぶる。中大兄、あいつだけはバカなのか利口なのか、何を考えているのか、おれにはさっぱりわからん――それが白布の素直な感想であった。しかし秘密組織だった能登軍団を、とにも

かくにもこうして大和朝廷の正規軍にしてくれたのは中大兄だ。また、韓国出兵も中大兄の決断によってきまったという。それはありがたい。ならば、中大兄よ、何を今更ためらうのだ

「白布、私のいった言葉、どうか心にとめておいて下さい」

阿曇連比邏夫はポツリといいすてると去っていった。

「弱虫め！ ひたすら官位が昇進することばかりねがう書物の虫め！ お前らに本当の戦争がわかるか」

白布は、比邏夫の後姿をにらむと幕舎の中へ入った。

「身体をおふきなさいませ」

湯気の立つ布がさし出された。玉櫛（タマグシ）である。

「うむ」

さらさらと着衣を脱ぐと、すっぱだかになって白布は身体を拭う。

「玉櫛」

「はい」

「ふいてくれ、その方の手で」

玉櫛は答えるかわりに布をとってふきはじめた。

とつぜん白布は大声で笑った。

「玉櫛、今にみておれ。朝鮮半島へ渡ったら、おれの軍団がどのような働きをみせるか、比邏夫の腰ぬけにたっぷりと味わせてやるわ。能登軍団は、新羅（シラギ）をうち滅し、高句麗（コウクリ）を平らげ、やかて唐へ討ち入る 玉櫛、そこは今までおれの夢だった大陸なのだ」

「……」

「玉櫛」

白布はすっぱだかのまま玉櫛の手をつかむとぐいとひきよせる。玉櫛の身体は何の抵抗もなく、白布の胸へ抱かれた。

「あきらめてくれたな、よく」

「……」

白布は玉櫛の唇を吸う。

「弓月のことなどもうよい。そうとも、何といったって、これからの日本は、我々騎馬をよくする民族の時代だ」

「おっしゃらないで」

玉櫛はみずから唇を白布のそれにおしつけて白布の言葉を封じる。

白布は又笑う。

「つつましい、出雲族の、お前の今の姿を弓月の奴に見せてやりたいわ

「みせていただいた、とっぷり」

とつぜん、幕舎の表で、おしつぶしたような声がひびいた。

瞬間、白布は、はっと玉櫛の身体をなげ出すと、ぬぎすてた剣へ手をのばした。

「動くな！」

ズブリ！

幕舎を破って、一本の槍の穂先が蛇のようにのびて、全裸の白布の胸もとをまっすぐにねらった。

剣へのびた白布の手は凍った。

「お前は……その声は……」

「そうとも、弓月（ユヅキ）だ」

はっと玉櫛は胸を抱く。あの人が、いま幕舎の天幕を一枚へだててすぐそこに。

「玉櫛」

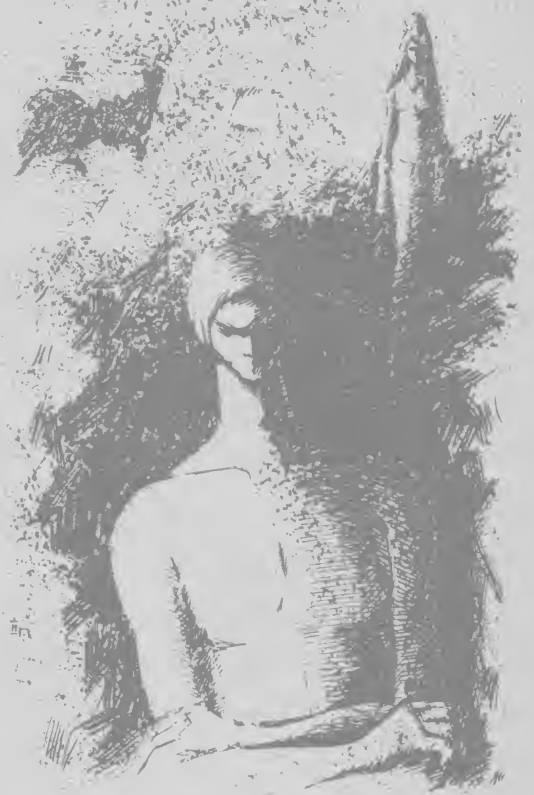
表の声は、彼女の名を呼んだ。

「玉櫛……」

「……」

「どうした、いるのだろう。返事をしろ」

「は、はい」

「会いたかったぞ。迎えに来たのだ」

「は、はい」
「さ、出て参れ」
「は、はい」
何故か玉櫛は同じ返事しかできない、そんな自分がもどかしい。
「どうした、出て来い、玉櫛」
「はい」
一歩踏み出す。
槍に、胸板をねらわれて、動くことのできない白布の目だけが動いて玉櫛をみた。
又、一歩。
「早くしろ」
「はい」
又、一歩。
「行くのか」
うめくように白布がいった。
思わず立ち止まる。
「貴様、やっぱり、弓月のところへ」
何故か、そのとき、玉櫛ははげしく首をふる。まるで幼児がいやいやをするときのように。
「どうした！ 早く出ろ！」
弓月の声が、又かかる。
一瞬、玉櫛は、ぱっとかけ出すと幕舎の表へ出た。
とたん、弓月の槍がはね上がって幕舎の天幕を一直線に切ると、そのまま白布の方へ向かって弓月の身体はとんだ。
しかし、この間に白布は、すでに剣をぬきはなっていた。
剣と剣の火花が闇に散った。
が、何というはやわざ！ 弓月は槍で白布を襲うと同時に、自分も剣をぬいていたのである。
白布は、ようやくぬいた剣で、弓月の槍を押さえている。
が、弓月のもう一方の手ににぎられた剣はつめたく光りながら、白布の胸をねらっていた。
「白布、長い間、憎みつづけてきた」
「それは、お互いさまだ」
「どうやら、今夜、ここで決着がつきそうだな」
「まァな……」
筑紫平野を吹く風は冷たく、まわりの数知れない幕舎からは物音一つ聞こえない。誰も彼も昼間のはげしい訓練のため、ぐっすりとねむりこけているのにちがいなかった。
そしてまた、弓月の攻撃は、その人たちの眠りをさますには、あまりに静かで、かつ迅速であった。
「殺すのか、おれを……」
「ああ、幾千の出雲族と蝦夷の恨み——それはお前の剣が何よりもよく知っているはずだな」
「成程」
そのとき、弓月は、白布の眼尻にポツリと浮かぶ涙を見つけた。
「白布、お前……」
「いうな」
そして白布は、低く笑いはじめた。
「皮肉なものよな。子どもの頃から夢にまでみた大陸へ、わが父祖の故郷へ、今一歩というときになって、お前に殺されるとは」
「運命だな。これも」
一瞬、弓月の剣が光った。
「白布、覚悟！」
そのときだ。じっと立って二人の対決をみていた玉櫛が、ぱっと白布にはしりよって、まるでおおいかぶさるようにして白布をかばって倒れた。
「何をする、玉櫛！」
弓月もおどろいたが、白布もおどろいたようであった。
「玉櫛！」
「殺さないで、この人を」
月の光に、玉櫛の顔が白く光った。

「何をいう。玉櫛、こいつは、お前たち出雲族を殺し、その上……」
「わかっています」
玉櫛の声は静かだった。すべてをあきらめ切った女のおちつきがその目にあった。
そう、私はあきらめよう。なぜなら、私は出雲族であるよりも、やはり一人の女なのだから――。
玉櫛はきっぱりと顔を上げると弓月にいった。
「助けてあげて下さい。この人は、やがて生まれる私の子どもの父親です」
「何だって！」
叫んだのは白布であった。
「それでは、玉櫛！」
「犯された。私はあなたに、暴力で、ムリヤリ犯された。二度も三度も。心はいつもあなたにはなくとも、私の女はあなたの男をうけいれた」
玉櫛はとつぜんこみ上げてくる激情にセキを切ったように話しはじめた。
「でも、それでも、たとえ愛なき抱擁でも私の女は、あなたを……そしてあなたの子ども……」
もっと話そうとした玉櫛はとつぜん襲った悪感にうつぶし、そして嘔吐した。
玉櫛の胎内にはいつか白布の子が宿っていたのである。
「玉櫛……」
うめくように弓月がいった。
「それでいいのか、玉櫛」
玉櫛はうつむいてうなずく。
「後悔はしないのか」
「……」
「誇り高き出雲族の娘が、騎馬の民の子を生むというのか」
玉櫛はうなずく。
「誰の子どもであろうと私の子どもは私の子どもです」
「そうか」
弓月は、そっと槍と剣をおさめた。
「又、会う、白布」
ポツリとつぶやいた弓月の目に涙があった。
「さらば……」
いいすてると白布は、草原の中を足早に去っていく。
「あなた……」
玉櫛はつぶやく。
「あなた！」
そして叫んだ。
「弓月！」
玉櫛は一散に弓月を追う。が、去りゆく弓月の影は、一度立ち止まったきり、ふり切るようにして歩みつづける。
追いかける玉櫛は、草に足をとられてふしまろぶ。
「弓月……」
その彼は草原の中にもういない。
「弓月！」
玉櫛ははじめて大きく、声を上げて泣いた。

（二）

巨木が次々と倒れる。何十年、何百年、人間の手の入らぬ森の巨木が、音をたてて倒れる。
そのたくましい動きを見ながら、ひとりうたうようにつぶやくのは額田王（ヌカダノオオキミ）である。
「神の木を伐る。神の御柱を伐る。伐るものは誰？　神の木に宿るものは誰？」
額田王の声は、まるで天からの声のように時には地からの声に森の木々の間を流れる。
阿曇連比邏夫に指揮されて木を伐っていた兵士たちは、その声をきくと一様に何かいやな気持におそわれていったんは手をとめるのである。
「どうした！　皇居の御造営の木だ！　なまけるな！　伐れ！」
そんな兵士たちに、大和の兵士たちのムチが飛ぶ。
木を伐る兵士たちは筑紫で集められたものたちだった。
だから、彼らは知っている。今、彼らの伐っているこの木が、朝倉の社の神木であることを……スメラミコトは神よりえらいのか、神の木を伐って宮殿をつくる……。
だがしかし、兵士たちはまた知っていた。このところ、大舎人（オオトネリ）たちや天皇のみぢかにつかえる者たちの間に、病気になるものや、ケガをするものや、死ぬものが相ついでいることを。
宮中に毎晩鬼火があらわれるといううわさも立った。それは神のたたりであると、まことしやかに筑紫の平野に伝わっていった。
だが、それでも、宮殿造営の工事はすすめられていった。

（三）

遠く、うた声と人々のざわめきが聞こえる。今日は新宮殿・朝倉橘広庭宮（アサクラノタチバナノヒロニワノミヤ）が完成したことを祝う祭りの日である。

馬蹄の音が聞こえる。おそらく白布ひきいる能登軍団が集まった民衆に勢力誇示の訓練を行なっているにちがいない。天皇はすでに新宮にうつっている。

弓月は、ひとり、伐り倒された木の伐り株に腰を下ろして、そのはるかなものおとを聞くともなしに聞いている。

玉櫛——その名を呼ぶたびに胸がふさがる思いがする。

思えば、能登で出会って今日まで、おれの戦いはすべて玉櫛ひとりのためにあったのではないか。その玉櫛が、こともあろうにあれほど嫌っていた白布の子をみごもり、おれに向かってやつの命乞いをするとは……。

すべて終わった…そんな気がする。がしかし、その弓月の耳の奥に、忘れようとしても忘れられぬひびきが海鳴りの如くのこっている。

銅鐸の妙なるしらべである。

玉櫛だけのためではなく、おれは、もう一度、この日本の空に、銅鐸の音のひびきわたる日のために戦っていたのだ。今は弓月はムリにでもそう思いたい。

そう思いたいと心にきめつつ、弓月は足元の清流に白い葉を流す。

水は流れ下って新宮へ入る。大舎人や宮仕えの人たちの病気は、すべて水に原因があった。

そうだ、おれの敵は、この日本から銅鐸のひびきを消そうとする中大兄皇子だ。

葉を流す。白い葉は清流にとけ、音をたてて流れた。

（四）

六六一年七月、斉明天皇は九州筑紫で崩じた。女帝の遺体は海路、飛鳥へ運ばれたが、九州での喪の間、朝倉山の頂上から、大きな鬼がのぞいていたとのうわさが新しく筑紫平野に流れた。

（つづく）